第181号（2001年6月）

調査と情報

編集・発行
㈱農林中金総合研究所基礎研究部
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-8-3
TEL. 03-3243-7331
FAX. 03-3246-1984
URL：http://www.nochuri.co.jp
E-mail：kaneko@nochuri.co.jp

農山漁村と都市の交流

我が国でも、ヨーロッパ諸国にならって、遅ればせながら、団体旅行とは違ったかたちでの「グリーンツーリズム」が盛んになってきた。都会生活にない農山漁村（以下農村と略称）の自然的景観や伝統的文化による「心の安らぎ」を求める願いがその根底にあるように思われる。

また、三年前「定年帰農」を特集した雑誌が、この種の雑誌としては珍しく増刷された。現在は同じテーマで第二集が発行されている。これも、長引く経済不況のなかで、農業に雇用の場を求めた面とともに、社会の中に農村の価値を再認識する新しいライフスタイルが興ってきた証左と読み取ることができよう。

いま、人々が求めているものは、新鮮で健康によい農林水産物の提供といった農林漁業の生産的機能はもちろんだが、その他に何よりも田んぼや森のおりなす色彩、夕日を映す水面のたたずまい、温かい人々とのふれあいなど、景観の形成を含む農林漁業の持つ「多面的機能」なのだと思われる。

そしてもう一つ、最近の教育改革における「総合的学習の時間」の創設により、改めて大きな期待が寄せられているものに、少年時の農村での体験学習がある。都会の子供にとって農村の生活体験は、自然と人間の最も根源的な営みの理解につながり、子供の成長に主体的な教育的効果をもたらすにちがいないと考えられる。

ところで、これまでの農村と都市の交流事業では、農村地域全体の受け入れ態勢整備に力点が置かれてきて、その結果、農村に一定水準の全国共通の都市的な施設が建設され、農村の人が、都市の人に合せる方向で諸活動が進められた面が多くみられた。

しかし、農村を訪ねる都市の人々は都会にないその農村独自の価値に触れ感動を得ようと思っているのであるから、大切なことは、各々の農村に固有の風土と文化に根ざした本来の農村らしい景観や生活が保全されていることであろう。農村に住む人々がその地域の特色を再発見し、自然と共生した農村環境を維持してこそ、農村と都市の交流はより促進されることとなるであろう。それは、農村の情報発信力の向上を図ることやインフラ整備を進めることと何ら矛盾しない。

いま、農村と都市の相互補完という視点にたつと、グリーンツーリズムにさらに新しい風が吹いているのが見える。宮崎県西米良村などの「ワーキングホリディ」はその一つの試みである。それは単なる長期滞在型の余暇活動におわることなく、人手が不足する時期に都市の訪問者が大地に汗して農作業を手伝いながら交流を深め、同時に村の活性化を図るというものである。これは農村と都市の人々の双方にメリットがあり、個人レベルで正に対等の立場で協働しあうもので、これからの我が国の特色ある農村の都市と交流の方向を示唆するものと考えられるのである。

（農中総研理事長　浜口　義曠）

今月のテーマ：農山漁村と都市の交流

農山漁村と都市の交流…… 1
酪農から伝える命のひびき…… 2
生産者等による水産物直販を考える…3～4
森林を活かした「都市との交流」の動向とその意義について…5～6
消費者と地域を結ぶ観光農園……7～8
ぶっくレビュー『国内農産物の先物取引』… 9
あぜみち……10
虹のかけ橋……11
統計の眼「農業・食料に関連する産業」…12
編集後記……12